

『破戒』

とうじょうじんぶつ
登場人物

うしまつ
丑松 1

うしまつ
丑松 2

うしまつ
丑松 3

ぎんのすけ
銀之助

けいのしん
敬之進

お志保
しほ

うしとうそん
牛藤村 1

うしとうそん
牛藤村 2

うしがみ
牛神

「破戒」出番表

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
丑松 1		○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	
丑松 2		○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	
丑松 3		○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	
牛藤村 1		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
牛藤村 2		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
銀之助		○	○			○		○			○	○		
敬之進		○			○		○							
お志保 1	○			○		○		○	○		○	○	○	○
牛神	○	○	○		○			○	○		○		○	○

【0】

牛神

うしがみ すべ
総ては今この瞬間に起きている。

この瞬間こそが、過去や未来も変える可能性を秘めている。

お志保

はじめまして。私は小説「破戒」に登場する。お志保と言う者です。

皆さん、ご存じかと思いますが「破戒」の作者は、島崎藤村です。

随分と前に書かれた小説ですので、古く感じる所もあるかと思えます。

古さも文学的な味わいとして、受け止めていただけたら幸いです。

島崎藤村は、小諸に住んでいたことがありました。小諸での生活が「破戒」の

世界観を作ったと思います。浅間山の雄大な自然と、そこに暮らす人々の営みに、

島崎藤村は、豊かな時間の流れを感じたのだと思います。

【1】

牛神 うしがみ
島崎藤村「破戒」。これより開演いたします。

牛藤村1 うしどうそん
これは過去の物語である。過去には後の時代にとって、反省すべき事柄も多い。

過去こそ、真実であるからであろう。天長節の夜。宿直の当番であったので、

教員の瀬川丑松と土屋銀之助は小学校に残った。

牛藤村2 うしどうそん
風間敬之進は心細く、名残惜しくなって、いつまでも去り兼ねる様子。

牛藤村1 うしどうそん
宿直室の時計は九時を打った。丑松は見廻りに行き、二十分ほどで帰って来た。

銀之助 ぎんのすけ
おい、どうした？

敬之進 けいのしん
顔色が悪いですよ。

丑松1 うしまつ
実は、不思議なことがあるんだ。

丑松2 うしまつ
校舎を廻って運動場に行くと、誰か呼ぶ声がある。それは、僕の親父の声なんだ。

銀之助 ぎんのすけ
妙なことが有るものだな。

敬之進 けいしん
どんな風呼びました？

丑松3 うしまつ
丑松、丑松とつづけざまに。

敬之進 けいしん
名前を？

丑松1 うしまつ
確かに呼んだんです。親父の声だった。

銀之助 ぎんすけ
お父さんは西乃入の牧場だろう。あんな遠くから、まさか。

丑松2 うしまつ
また声が！もう一度行ってきます。

敬之進 けいしん
どうも気掛かりだ。我々も行くか。

銀之助 ぎんすけ
そうですね。

牛藤村2 うしまつ
丑松は、声のする方を辿って行った。

牛藤村1 うしまつ
丑松、丑松。

丑松3 おとっさん、おとっさん。

丑松1 また声が聞える。

銀之助 おい、大丈夫か？何も聞こえなかったぞ。

敬之進 吾輩にも聞こえない。きつと幻聴だよ。

銀之助 まあ、気にするな。ちよつと疲れているんだよ。

牛藤村2 翌日の朝。丑松は父の死を知らせる電報を受けたのであつた。

父は西乃入の牧場で、気性の荒い種牛に襲われ亡くなつた。

牛藤村1 丑松、隠せ。いかなる目に遇おうと、いかなる人に巡り合おうと決つて打明けるな。

牛藤村2 一時の感情や気の迷いで、この戒を破つたなら、世の中から捨てられたものと思え。

牛藤村1・2 隠せ。隠せ。絶対に隠せ。これが世に出て身を立てる穢多の秘訣じゃ。

丑松(全員) おとっさん、おとっさん。

【2】

牛藤村 1

蓮華寺では下宿を兼ねた。丑松が急に引越しを思い立ち、

借りる事にした部屋は、蔵裏の続きにある二階の角のところ。

牛藤村 2

その窓から、飯山の町並みや小学校も見える。夕方近くに丑松は町へ出かけた。

丑松 1

本町の雑誌屋には、新着の書物を筆太に書いて張出してあった。

丑松 2

かねて新聞広告を見て、出版の日を楽しみにしていた「懺悔録」

牛藤村 1

猪子蓮太郎、著。定価も書添えた広告が目につく。

丑松 3

胸が踊るような心地がした。

丑松 1

黄色い表紙に「懺悔録」としてある本。四十銭を出して買い求めた。

丑松 2

本を抱いて下宿に帰って行く途中、学校の同僚に会った。

銀之助

瀬川君、大層遅いじゃないか。

牛藤村2 銀之助は、丑松から下宿を替えた話を聞いた。

銀之助 君はよく下宿を替える人だねえ。こないだ引越したばかりじゃないか。

牛藤村1 その時、丑松の持っている本が目についた。

銀之助 「懺悔録」か。相変わらず君は猪子先生のものが好きだな。まあ君は愛読を

通越して崇拜だ。さぞかしました、この本の事を聞かせられるだろうなあ。

牛藤村2 夕餐の煙は町の空をこめて、同僚の姿も黄昏がれて見えた。

丑松3 僕は、いったい、なんの為に生きているのか。朝、起きて、食事をして、

うろろうして、夜になれば、寝る。人を、こわがってばかりいる。

丑松1 僕は、どんな人が偉いんだか、どんな人が悪いんだかその区別さえ、

はつきりしない。淋しい顔をしている人が、偉そうに見えて仕方が無い。

丑松2 可哀想だ。人間が可哀想だ。みんな可哀想だ。

丑松3 僕は、人の真似をして、憎むの軽蔑するのと騒ぎ立てていただけなんだ。

実感としては、何もわからない。

丑松1 人を憎むとは、どういう気持ちか、人を軽蔑する、嫉妬するとは、どんな感じか、

何もわからない。僕が実感として、わかる情緒は、可哀想という思いだけだ。

丑松2 この感情だけで、生きて来たんだ。

丑松3 僕は、可哀想に思われて仕方がないんだ。

丑松 (全員) 可哀想に思われて仕方がないんだ。

牛神 過去と未来に縛られる者は、今を感じる事が出来なくなる。

牛藤村 1 丑松は下宿の畳の上に倒れて、身動きもせずに考えていた。

牛藤村 2 『懺悔録』は、我は穢多なり、という文句で始めてあった。

牛藤村 1 我は穢多なり。同じ人間でありながら、軽蔑される道理は無い。

牛藤村 2 過去の記憶が丑松の胸の中に生き返った。

丑松 1 七つ八つの頃まで、よく他の子どもに調戲われたり、

丑松 2 石を投げられたりした。その恐れの方がふたたび起って来た。

丑松 3 朦朧ながら、小諸の向町にいた頃のことを思い出した。

丑松 1 『懺悔録』を読んで、せつない苦しみを感じた。

牛藤村 1・2 丑松もまた、穢多なのである。

お志保

「破戒」は「穢多」という身分の差別を主題として書かれた小説です。

穢多とは、士農工商という身分の下に位置づけられていました。

日本では古来より「血」が穢らわしい物とされており、
生き物を屠殺し皮を剥ぐ職業も忌み嫌われていたのです。

これらの職業を生業とする人々が穢多と呼ばれ、

その身分は代々引き継がれていったのです。

【4】

丑松 1 校長先生、何か御用談中じゃ、ありませんか。

牛藤村 1 いえ。別に。

丑松 2 実は風間さんが、お願いがあるそうです。

牛藤村 2 私に？何ですか。

敬之進 あの、ですね。少し。お願いしたいことがあまして。えっと。そのですね。

丑松 3 そんなに遠慮しないで。

丑松 1 私から伺います。風間さんのように退職となった場合には、恩給を受けさせて

いただくわけまえ。頂く訳に参りませんものでしょうか。

牛藤村 1 無論です、そんなことは。小学校令の規則を出して御覧なさい。

丑松 2 そりゃあ規則は規則ですけれど。

牛藤村2 おんきゆう う 恩給を受けられるという人は、満十五ヶ年以上、在職したものに限った話です。

牛藤村1 かれ じゅうよんかねん ろっかげつ 彼は十四ヶ年と六ヶ月にしかならない。

丑松3 ほんとし でも、わずか半年のことで。

牛藤村2 ゆる さいげん な それを許したら際限が無い。

牛藤村1 おんきゆう あきら ようじょう 恩給のことは諦めて養生なさい。

丑松1 あなた おねが どうです、貴方からも御願いしては、

敬之進 いま おはなし うかが ことば したが 敬之進、今の御話を伺えば、お言葉に従って、諦めるより外はないと思います。

牛神 けいべつ しつと ぞうお さべつ にんげん おくそこ かか やみ つめ 軽蔑。嫉妬。憎悪。そして、差別。人間が奥底に抱える闇の冷たさを感じる。

牛、牛、牛。 われ うしがみ 我は、牛神なり。

牛藤村2 もとより銀之助は丑松の素性を知る筈がない。二人は長野の師範校にいる頃から、

気の合った友達だった。

牛藤村1 あの頃に比べると丑松は変わった。以前の快活さを失った。

銀之助 どうにも気掛かりで、蓮華寺に尋ねて行った。苔蒸した石の階段を上り、

落葉を掃いていた寺男に、瀬川君はおりますか。と聞く、

寺男は蔵裏の方へ見に行った。急に声がした。

丑松1 まあ、あがりたまえ。

銀之助 見ると瀬川君が二階の障子を開けて、顔を出した。私は暗い梯子段をあがった。

牛藤村2 机の上には『懺悔録』

銀之助 よく君は引越して歩くね。部屋は、前の下宿の方がよさそうじゃないか。

丑松2 このの、鼠ねずみが多いのには驚おどろいた。

銀之助 鼠ねずみ？

丑松3 昨夜は枕元まくらもとにも来きたよ。今朝その話はなしをしたら、奥様おくさまの言草いぐさが面白おもしろい。

丑松1 猫ねこを飼かって鼠ねずみを捕とらせるより、自然しぜんに任まかせて養やしなってやるのが慈悲じひだ。

丑松2 食物たべものさえ宛行あてがってやれば、そんなに悪わるさする動物どうぶつぢやない。

丑松3 うちの鼠ねずみは温順おとなしいから御覧ごらんなさいって。そう言いわれて見みると、

少しすこも人ひとを恐おそれない。白昼ひるまですら出でて遊あそんでいる。

銀之助 奥様おくさまという人ひとは変かわった人ひとだね。

丑松1 普通ふつうの人ひとより宗教しゅうきょう的てきなところがあるのさ。

銀之助 他ほかにはどんな人ひとがいるんだ？

丑松2 子坊主こぼうずが一人ひとり。下女げじよ。それに庄太しょうたという寺男てらおとこ。

丑松3 それから、風間さんの娘で、このお寺に貰われて来ている、お志保さん。

銀之助 風間さんの娘が。

丑松1 そう。お志保さんは、僕たちの来る前の年に学校を卒業した人だよ。

お志保 明治元年。天皇陛下がご誓文を出されて、我が国は近代国家の仲間入りを果たしました。

士農工商の身分制度の廃止。明治四年には解放令によって穢多、非人という身分の区別も

廃止されました。我が国は天皇陛下のもと、総ての国民が平等なのです。

と、私は学校で教わりました。でも、本当に平等なんでしょうか？

牛藤村 1

いちぜん 一膳めし、ささや 笹屋。おもて 表の障子を開けて入ると、しょうじ のみくいしている二、さん 三の客。

かみ 主婦さんは流許に行ったり、ながしもと 竈の前に立ったりして、かまど 忙しそうに働いていた。

丑松 1

かみ 主婦さん、なに 何かありますか。

牛藤村 2

かわざかな 川魚の煮いたのに、た 豆腐の汁ならごわす。

丑松 2

りようほうもら そんなら両方貰いましょう。それで一杯飲まして下さい。

敬之進

おきやくさま よう、めずらしい御客様が来てますね。

丑松 3

かぎま 風間さん、釣りですか。ちったあ釣れましたかね。

敬之進

えもの 獲物なしさ。あさ 朝から寒い思をして、おも 一匹も釣れない。

丑松 1

ひと とりあえず、さしあ 一つ差上げましょう。

敬之進

きみ 君からさかすき 盃を貰おうとは。どうり 道理で今日は釣れない訳だ。

牛藤村1 身を震わせながら、さも甘そうに地酒を飲む。

敬之進 わがはい がっこう や 我輩も学校を辞めてから、これという用が無いもんだから、釣りなどを始めた。

丑松2 この雪の中で釣れるんですか。

敬之進 素人はこれだから困る。冬はまた冬で、人の知らないところに面白味がある。

なに、風さえなけりや、そう思った程でもないよ。しかし、なにが辛いと言ったって、

用がなくて生きて居るほど世の中に辛いことは無いね。実は、こないだ、娘に逢いました。

丑松3 お志保さんに。

敬之進 娘の方から逢ってくれろという。もつとも、我輩もね、成るべく娘には逢わない

ようにしている。ところが何か相談したいことがあると言いうもんだから、

久し振に逢ってみた。もうどうしても蓮華寺にはいられない、一日も早く家へ

帰るようにしてくれ、頼む、と言う。事情を聞いて見ると無理もない。その時、

わがはい はじ じゅうしよく せいしつ し 我輩も始めてあの住職の性質を知ったような訳さ。

丑松 1

せいしつ い 性質と言うと？

敬之進

よく せけん りっぱ じんぶつ い 女 というものにかけて、非常

よわ おとこ 弱い男があるものだね。蓮華寺の住職もやはりそうだろうと思

かなし おそろ 悲いやら恐しいやらで、夜も寝られないと言

むすめ とびこ 娘が飛込んで来て見給え。八人の親子がどうして食

ない。せんぼう おや 先方が親らしい行為をしないまでも、これまで育

いったん れんげじ むすめ な いじよう 一旦、蓮華寺の娘と成

つと ぬ そこを勤め抜くのが孝行というものだ。とまあ、無理

丑松 2

し 知りませんでした、お志保さんがそんな辛い思

敬之進

わがはい なき ちちおや 吾輩は情けない父親だよ。

牛藤村 2 この大雪を衝いて、市村弁護士と蓮太郎の二人が飯山へ乗込んで来る、

という噂は学校に居る丑松の耳にまで入った。

牛藤村 1 その日は宿直の当番として、丑松と銀之助は学校に居残ることに成った。

牛藤村 2 もっとも銀之助は用事があると出て行って、日暮になっても帰って来なかった。

牛藤村 1 蓮華寺の鐘の音が宿直室のガラス窓に響いて聞える頃、

牛藤村 2 ことに烈しい胸騒ぎを覚えて、何となくお志保の身も案じられる。

牛藤村 1 さまざまな想像に耽りながら、悄然とランプの火を見つめて居るうちに

牛藤村 1・2 お志保が入って来た。

丑松 3 お志保さん。

丑松 1 どうしてこんなところに。

お志保 何故、父や弟にばかり親切にして、私にはよそよそしいの。何故、優しい言葉の一つも

懸けてくれないの。何故、口唇は言いたいことも言わないで、堅く閉じ、塞がって恐れと

苦しみとで震えているの。今の私を見て。

銀之助 見給え、君があまり沈んでいるから、だから君は誤解されるんだ。

丑松 2 誤解されるとは？

銀之助 君を穢多だなんて、実に途方もないことを言う人もいる。

丑松 3 誰がそんな事を？

銀之助 僕は青年時代の悲しみとということを考えて、いつも君の為に泣きたくなる。

実際、僕は君の心情を察している。君の慕っている人に就いても、僕は同情を寄せている。

君から切出してくれと、およばずながら出来るだけのことは尽すよ。

牛藤村 1・2 隠せ。隠せ。絶対に隠せ。

これが世に出て身を立てる穢多の秘訣じゃ。

丑松（全員）おとっさん、おとっさん。

牛藤村 1 丑松は自らの叫び声で、

牛藤村 2 夢から目を覚ましたのである。

牛神 迷いと葛藤の中に、別れと苦しみの懐古園。

黄金の寅が、独り侘しく草笛を聴く。

嗚呼、桜の花よ。

牛藤村 1 月曜の朝早く校長は小学校へ出勤した。

牛藤村 2 応接室の側の一間を自分の部屋と定め、毎朝授業の始まる前には、

牛藤村 1 そこに閉籠るのが癖。

牛藤村 2 それは事務の支度をする為でもあったが、また一つには職員達の不平と、

煙草の臭気を避ける為でもあった。

牛藤村 1 戸を叩くものがある。

牛藤村 2 その音で、すぐに校長は勝野文平ということを知った。

牛藤村 1 校長はこうして、お気に入りの教員から報告を聞くのである。

牛藤村 2 いつの間にか二人は丑松の噂を始めた。

牛藤村 1 勝野君。君は、妙なことを言ったね。どうも君の話は要領をえず、解りにくい。

牛藤村 2 一生の名誉めいよに関かかわることを、迂濶うかつにはしゃべれないじゃ有ありませんか。まあ、事じじつ実じつだとしたら

瀬川君は学校せがわくん がっこうにいられなくなるでしょう。

牛藤村 1 誰だれから彼かれのことを聞きいたのかね。

牛藤村 2 妙みょうな人ひとから聞ききました。まあ代議士だいきしにでも成なろうという位ぐらいの人物じんぶつですから、

無責任むせきにんなことを言いう筈はずも有ありません。

牛藤村 1 代議士だいきしにでも？高柳利三郎たかやなぎりさぶろうか。益々ますます、気きになる。はつきり言いいたまえ。

牛藤村 2 わかりました。ちよつとお耳みみを拝借はいしゃく。ヒソヒソヒソ。

牛藤村 1 まさか！瀬川君せがわくんが穢多えただとは、夢ゆめにも思おもわなかった。

お志保 明治三十二年めいじさんじゅうにねん。島崎藤村しまさきとうそんは小諸義塾こもろぎじゅくの英語教師えいごきょうしとして小諸こもろに赴任ふにんし、六年間ろくねんかん暮くりました。

結婚けっこんして、子こも授さずかります。この頃ころからそれまでの詩作しさくから散文さんぶんへと転回てんかいしていきます。

そして、小諸こもろや千曲川ちくまがわ一帯いちたいを描写びようしゃした「千曲川ちくまがわのスケッチ」をか書かきました。

島崎藤村が「破戒」を書き始めたのもこの頃からです。

藤村は小諸で何を感じて「破戒」を書き始めたのでしょうか？

牛神

町の田が戸惑いつつ現れた朝。

藤の澤は酒に、呑まるる。

我。迷いの中に、揺蕩う。

知らぬ間に蔵へ入らん。

丑松1 とある店の横手に、貼付けてある広告が目についた。

丑松2 見ると政見を発表する会で、猪子先生の名前も一緒に書き並べてあった。

丑松3 会場は法福寺、その日の午後六時から開会するとある。

丑松1 日暮れを待って、人知れず猪子先生に逢いに行こう。

牛藤村2 こう考えて、蓮華寺に戻り部屋に居ると、奥様が入って来た。

牛藤村1 こんなことになりやしないか、と思つて私も心配していたんです。

牛藤村2 と前置をして、奥様は昨夜の出来事を話した。

丑松2 日暮れ頃、お志保さんは郵便を出すと言つて出たつきり、帰つて来ないとのこと。

丑松3 箆笥の上に置いて行つた手紙は奥様へ宛てたもので。

丑松 1 その中には、自分一人の為に様々な迷惑を掛けるようでは、

義理ある両親に申訳が無い。などと書いてあった。

牛藤村 1 心配で眠りませんでしたよ。今朝早く人を見させにやりました。父親さんの方へ

帰って居るらしい。和尚さんだって眼が覚めましたろうよ、今度という今度は。

牛藤村 2 奥様が出て行った後、しばらく丑松は古壁によりかかって居た。

丑松 2 釣りと昼寝と酒より外には働く気のない父親。

丑松 3 あの家へ帰ったとしても、果してこれから、お志保さんはどうなるだろう。

丑松 1 言うに言われぬ悲しい心地になった。

牛藤村 1 急に丑松は壁を離れた。廊下を通り抜け、蓮華寺の門を出た。

丑松 2 猪子先生の事を考えながら、千曲川の畔へ出た。先生に自分のことを話そう。

丑松 3 煙る夜の空気を浴び、やって来る人影を認めた。演説会が終ったところだ。

丑松 1 皆、激昂したり、憤慨したりして、聴衆の群は雪を踏んでぞろぞろ帰って来る。

丑松 2 猪子先生の演説は深い感動を町の人々に伝えたい。

牛藤村 2 宿に行つて逢おう。こう考へて歩いた。表に立つて覗いて見ると、取込んだこと

でも有るのか人々が出入して居る。亭主であろう男を呼留めて、

蓮太郎のことを尋ねた。すると亭主の口から意外な報知を聴いた。

丑松 3 法福寺の門前で猪子先生が襲われた。

牛藤村 1 丑松は亭主の後について法福寺へと急いだ。

牛藤村 2 丑松が駈付けた時は、間に合わなかった。聞いて見ると、蓮太郎は石か何かで

烈しく殴られた。何の抵抗も出来なかつたらしい。血が雪の上を流れていた。

牛藤村 1 思わず蓮太郎の耳へ口を寄せた。

牛藤村 2 蓮太郎の蒼ざめた頬へ自分の頬を押し宛てて、呼んで見ても、

牛藤村 1 月の光は青白く落ちて、死の思いを添えるのであった。

丑松 1 先生、先生。

牛藤村 2 そして亭主は、だらりと垂れた蓮太郎の手を胸の上に組合せた。

牛藤村 1 戸板に載せ、上から外套を懸けて、宿に向けて出掛けた頃は、月も落ちかかって居た。

丑松 2 さくさくと音のする雪を踏んで、猪子先生の一生を考えながらついて行った。

丑松 3 我は穢多を恥とせず。その言葉が心に浮かんだ。

牛藤村 2 自分は隠蔽そうとして、その為に一時も自分を忘れることが出来なかった。

自分で自分を欺いて居た。何を思い、何を煩う。

丑松 (全員) 我は穢多なり。

丑松 1 明日、学校へ行って打ち明けよう。教員仲間にも、生徒にも話そう。

牛藤村 1 丑松は新しい暁の近づいたことを知った。

牛藤村 2

学校へ行く支度をする為、丑松は朝早く蓮華寺へ戻った。朝飯の後、机に向って進退伺を書いた。冬の朝日が射す障子を開けて、雪に包まれた町々を眺める。

牛藤村 1

家と家との間からは小学校の建物も、朝日をうけた。しばらく眺め入って居たが、胸に浮んだのは『懺悔録』第一章、『我は穢多なり』と書起してあったのを今更

牛藤村 2

のように新しく感じて、告白するように繰返した。我は穢多なり。我は穢多なり。蓮華寺の山門を出て、とある町の角で、向こうから巡査に引かれて来る男に出逢った。黒の紋付羽織、顔こそ隠して見せないが、当世風の紳士姿は、

牛藤村 1

高柳利三郎と知れた。町の人々は猪子蓮太郎を襲った犯人だと囁き合っている。学校の運動場には雪が積上げてあった。

丑松 2

玄関も、廊下も、広い体操場も、楽しそうな叫び声で満ちあふれて居た。

丑松 3 授業が始まるまで、あちこちと廻って歩くと、大鈴の音が響き渡った。

丑松 1 湧上る胸の想いを制えながら、三時間目の習字を教えた。

丑松 2 午後の課目は地理と国語だった。

丑松 3 五時間目には、国語の教科書の他に、習字の清書、作文の帳面、そんなものを

一緒に持って教室へ入った。

丑松 1 教科書に取掛り、やがていつもの半分ばかり講釈したところで本を閉じた。

皆さんに少し話す事があります。

丑松 2 と言って生徒たちを眺め渡す。

丑松 3 私は皆さんに、別れを告げなければなりません。

丑松 1 皆さんも御存じでしょう。

丑松 2 この山国に住む人々を分けて見ると、おおよそ五通りに別れて居ます。

丑松3 それは旧士族と、町の商人と、お百姓と、僧侶、それからまだ外に

丑松1 穢多という階級があります。

丑松2 もしその穢多がこの教室にやって来て、皆さんに国語や地理を教えるとしまし

たら、皆さんはどう思いますか、皆さんの父親さんや母親さんは、

どう思いましょうか。実は、私はその卑賤しい穢多の一人です。

丑松3 どうぞ私の言うこと、よく覚えて置いて下さい。これから五年十年と経って、

皆さんが小学校時代のことを考える時に。あの教室で、先生に習ったことが

有ったつけ。

丑松1 あの穢多の教員が素性を告白して、別れを述べた事を思い出して頂きたいのです。

私は卑賤しい生れでも、皆さんが立派な考えを御持ちなさるように、

それを心掛けて教えた積りです。

丑松 2 皆みなさんが御家おうちへ御帰おかえりに成なりましたら、どうぞ父親おとつさんや母親おつかさんに

私わたしのことを話はなして下ください。今いままで隠蔽かくして居いたのは全まったくすまなかつた、

とい言いって、皆みなさんに告うちあ白あけたと話はなしてくください。

丑松 (全員) 私わたしは穢多えたです。

丑松 3 不浄ふじょうな人間にんげんです。

丑松 1 許ゆるして下ください。

牛藤村 2 教室きょうしつに居いる生徒せいとは総立そうだちに成なった。その時とき、大鈴おおすずの音おとが響ひびき渡わたった。

教室きょうしつの戸とが開あいた。他ほかの組くみの生徒せいとも教師きょうしも出でて来きた。

牛藤村 1 銀之助ぎんのすけは職員室しよくいんしつで、

牛藤村 2 丑松うしまつのことを耳みみに入れいれ、

牛藤村 1 職員室しよくいんしつを飛出とびだした。

銀之助 玄関を横切って、左右に馳違う生徒の群を分けて、高等四年の教室に行ってみると、

廊下のところに校長、教師五六人、中に文平も、その他高等科の生徒が

瀬川君をとりまいて居た。君、大丈夫か？と話しかけると、

瀬川君は懐から進退伺いを取り出して、こう言った。

丑松（全員）許してくれ給え。私は穢多です。

銀之助 君の決意はわかった。ここは任せて、帰りましたまえ。

牛藤村 2 丑松は、銀之助に促され学校を出て行ったのである。

お志保 明治三十八年の四月。島崎藤村は、仕上げのすんでいない「破戒」の草稿を携え、

幼い娘達や妻と共に、東京へ引越しました。上京間もない五月に、三女がハシカから

急性脳膜炎をわずらい亡くなります。「破戒」が完成し、自費出版されたのは

明治三十九年三月でした。直後の四月に次女が急性腸カタルで、六月には長女が三女と

おなじ経緯で亡くなります。「破戒」完成の前後、藤村は相次いで娘達を失います。

父親としての藤村は、どんな想いを抱えていたのでしょうか？

牛神 浅間から吹き抜ける風に、黄金の稲穂が騒めく。

明かり染める谷に、武者が一瞬を捉える。

鈴の木は、ここに祈りを捧げ、

総てを潤す石の井戸が、

黒き岩を噴き上げる力の源なり。

牛、牛、牛。我は、牛神なり。

【11】

銀之助

瀬川君はきつと、お志保さんの所に行くはずだ。

牛藤村 1

銀之助は敬之進の住居を訪れた。

牛藤村 2

友達思いの彼は心配しながら、丑松を追って来たのであった。

銀之助

一寸伺いますが、瀬川君はこちらへ参りませんでしたか。

お志保

さつき御帰りに成りました。

銀之助

さつき？

お志保

瀬川さんは御気の毒な様子でした。私は穢多です、許してくださいと言って、

出て行ってしまわれました。

銀之助

あなたも驚いたでしょう。

お志保

いいえ、前に文平さんから聞きましたから。

銀之助 勝野君から？

お志保 瀬川さんのことを、それは酷い悪口を仰いましたよ。私は、気の毒でなりません。

銀之助 ほんとに？僕は、瀬川君を貴方に助けて頂きたいと思っていますのです。

お志保 私に？

銀之助 ええ。瀬川君は貴方のことを大切に思っています。自分の素性を考え及ばない希望と。

それで貴方に、今まで隠していた素性を告白したのです。瀬川君の真情が解りましたら、助けてやろうという考えを、持って下さることは出来ませうまいか。

お志保 もう私は、その積もりです。

銀之助 まだ近くにいる筈だ、一緒に探しましょう。

【12】

牛藤村1 丑松は、

牛藤村2 雪の中を

牛藤村1 千曲川に向かって、

牛藤村2 歩いていった。

丑松1 おとっさん。

丑松2 私は戒めを、

丑松3 破りました。

牛藤村1 隠せ。いかなる目にも遇おうと、いかなる人に巡り合おうと決つて打明けるな、

牛藤村2 一時の感情や気の迷いで、この戒を破ったなら、世の中から捨てられたものと思え。

丑松1 私は、世の中から捨てられる。

丑松 2 生きるのが、怖い。

丑松 3 世の中が、怖い。

丑松 1 人間が、怖い。

丑松 2 流れる血が、怖い。

丑松 3 私は殺されるのですか？

丑松 1 なぜ、殺されるのです？

丑松 2 人間ではないからですか？

丑松 3 人間とは、何ですか？

丑松 1 死ぬと、どうなるのです？

丑松 2 おとっさん、答えて下さい。

丑松 3 おとっさん、寒い。

丑松 1 独りは、寒いです。

丑松 2 死んでも独りですか？

丑松 3 私は、ここで

丑松 (全員) 死ぬのですね。

牛神 命は、この瞬間に生きている。

牛藤村 1・2 この瞬間の命こそが、

牛神 無限の可能性を秘めている。

銀之助 瀬川君！

お志保 無事でよかった。

銀之助 助けに来たよ。

丑松 1 助けに？

お志保 あなた 貴方は、もう独りじゃありません。

丑松2 ひと 独りじゃない？

お志保 そうですよ。

銀之助 ぼく 僕たちは、仲間じゃないか。

丑松3 ありがとう。

牛神 うしがみ 運命の流れに運ばれる命。

じかん 時間と言う支流が出会い、かさ 重なり合って、

じだい やがて時代という大きな流れを形成していく。

いのち 命は、川の流れの様に出会いを重ねる事で、ふか 深みを増していく。

たの 頼もしきかな命。いのち 牛、牛、牛。われ 我は、うしがみ 牛神なり。

いのち 命を見つめる者なり。

【13】

牛藤村1 これは過去の物語である。

牛藤村2 過去には後の時代に取り、反省すべき事柄も多い。

牛藤村1 過去こそ、真実であるからであろう。

牛藤村2 真実とは何か、考え続ける事が、新たな未来を開くだろう。

牛藤村1 そして瀬川丑松は、仲間たちの助けを借り、

牛藤村2 新たな広い世界へ、踏み出していったのである。

お志保 瀬川さんや銀之助さんとの出会いが、私の生き方を変えました。

今、この瞬間を大切にして、私は生きています。

牛神 島崎藤村「破戒」。本日は、これにて終演といたします。